# 「癒やしと命の主イエス」（ルカによる福音書一四章一～六節）

## 1　安息日の食事

〈安息日に癒やしをなさる〉、同じような出来事を、この福音書で、私ども何度か読んでまいりました。

同じような話なので、飛ばしたくなりますけれど、改めてゆっくり読んでみると、これまでと必ずしも同じでないことが分かります。そのことでまた、当然、疑問も発生いたします。

例えば、同じような話が何回も出てくるのは、どうしてだろう？　単純にいえば同じようなことが何回もあったからでしょうけれど、そればかりではないであろうことも言うまでもありません。あるいは、違いはあるのだろうか？　どんな違いがあるのだろうか？　そういったことが、さし当たって浮かんでくる問いです。文脈の違いもあると思います。前後関係が違えば意味も違ってきます。

今日の聖書は何を語っているのだろうか、神は今日私どもに何を語ろうとしておられるのだろうか、いま上げた、すぐにも思い浮ぶ疑問を頭の片隅におきながら、ご一緒に考えてみたいと思います。

安息日の癒やしという出来事は、振り返ってみれば、ガリラヤにおけるイエスの宣教のそもそもの始めからのものでした（四章、六章）。むしろそれが、イエスの活動の始まりであったのです。

そしてそれはガリラヤだけではありませんでした。ガリラヤを出てエルサレムに向かう旅を開始してからも、なされていたのです。前の章、一三章。覚えておられるでしょうか。十八年間も、腰が曲がったまま、伸ばすことができなかった一人の婦人の癒やしがありました（一〇節以下）。あれも、安息日、会堂（シナゴーグ）でイエスが教えていたときのことであります。

ガリラヤでも、エルサレムに向かう今この時も、安息日のイエスが、見え隠れしています。私ども改めて確認してよいのは、イエスが安息日をどんなに大切にしていたかということです。

それは自分が、安息日の礼拝にあずかるためというばかりではありません。もちろんそれが第一です。しかしそれだけではない。安息日は、まさに神の恵みが、神の救いが、ご自身によってもたらされるものとして明らかされなければならない時であったのです。その意味で、エルサレムに向かうこの時も、ガリラヤにいる時と、イエスの宣教は、何も変わっていません（一三・三二）。教え、癒やし、神の国の福音を宣べ伝えながら都に向かっていきます。

この会堂、その礼拝、イエスはひじょうに大切にしていたわけですが、しかし当時のユダヤ教の指導者たち、ファリサイ派とか律法学者の影響下にあったことも、言うまでもありません。イエスは彼らを厳しく批判しています。しかしだからといって会堂を見限ったり、見捨てたりする行動はとりませんでした。イエスは宗教的な天才としてではなく、メシア（キリスト、救い主）として、そこを神の国宣教の場としてい

たのです。
さて今日の聖書箇所、安息日の癒やしの出来事、これまでと、どこが違うのでしょうか。

安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになった・・・（一節）。

一番の大きな違いは、安息日とはいえ、ここは、会堂の礼拝の中での出来事ではなかったということです。
先ほど同じような話として、十八年間も腰が曲がったままの婦人の癒やしのことを上げましたが、それはイエスが、安息日に、会堂で教えていたときのことでした。ここはそうではありません。
安息日ではありますが、礼拝ではなく、「安息日の食事」の時のことであったのです。会堂の礼拝は午前と午後おこなわれていたようです。ここの食事が、礼拝の後なのか、前なのか、分かりません。敬虔なユダヤ人の家庭では、安息日は、決まった作法で、特別の食事がなされていたようです。ここは、会堂の礼拝ではなく安息日の家での特別の食事のことです。
この安息日の食事ということで、思い出すのは、昔々はじめてドイツに行って、語学研修のため、二ヶ月ほど下宿していたときです。カトリックの家庭でしたが、日曜日のお昼の食事に何回か招待されたことです。いわく、日曜日の昼の食事は、一週間で一番大切な食事（正餐）で、集まれるときは、家族は万難を排して集まって食卓を囲むのだというのです。私も家族の一員として扱われたわけです。安息日の食事の伝統が、そのまま残ったのかも知れないと、思い出したことでした。
今日の箇所は、もう一つ、食卓をテーマとしたこれにつづく箇所（七～二四節）の導入にもなっているところです。やがて話は〈神の国での食事〉（一五節）、「盛大な宴会」（一六節）にまで発展していきます。こうした文脈も考えに入れながら、今日の箇所は読まれなければなりません。

## 2　いやしてお帰しになった

いま少し申し上げたように、安息日の食事は、ちよっと格式の高いものです。イエスを招待した人も、「ファリサイ派のある議員」とありました。「議員」という言葉はここでは最高法院の議員も意味する言葉です。身分の高い人だったようです。この人がイエスを試そうとして招いたのではないと思いますが、ただこの主人と仲間の者たちである、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちも、そこで同じ食卓に着いていたのです。
そのため、ここでも、何か起こりそうな気配です。実際、またもや、安息日と癒やしの関係が問題になったのです。

人々はイエスの様子をうかがっていた。そのとき、イエスの前に水腫を患ってい

る人がいた。そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」。彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。そして、言われた。「あなたたちの中に自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」（一～五節）。

ファリサイ派の人々や律法の専門家たちが、「イエスの様子をうかがっていた」とあります。

このことからすると、「イエスの前に」いたという「水腫を患っている人」も、イエスが彼をどう扱うか、彼らがわざわざ連れてきた人のように見えます。イエスを試みるためです。

それを暗示しているのは、イエスの言葉です。いまお読みした中に「そこでイエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた」（三節）とありましたが、この「言われた」は、きちんと訳せば、「答えて、言われた」です。なるほどファリサイ派や律法学者からの、イエスに対する直接の言葉はここにありません。しかし、彼らは水腫を患った人を連れてきて、イエスを試した。安息日に、癒やしを行ってはならない、つまり働いてはいけないというのが、彼らの立場、彼らの律法解釈に基づく主張であったからです。

これに対して、病人の手をとって、癒やし、もとの生活へと戻してやる、それがイエスのおこなったことでした。

ご承知のように、安息日を守ることは、ユダヤ人にとって、もっとも身近でもっとも重要なつとめでした。割礼と並んで、自分たちが、神に選ばれた神の民であることを示すものであったのです。

安息日を守るというのは、この日を「聖別する」（出エジプト二〇・八）、週日と違う、特別な日とするということです。具体的には、いかなる仕事もしない礼拝の日とするということです。病気を治すことも、何かをすることですから、一般には不可です。ただ命に関わるような場合、例外として認められていました。ファリサイ派も律法学者もそれはよく知っています。イエスが、「あなたたちの中に自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」と言った通りです。

水腫の人をイエスは癒やした。ファリサイ派の人々や律法学者は、癒やさなくていいとは思わなかったでしょうけれど、直ちに命に関わる人とは見なかった、そこに違いがあったのです。

## 3　救いの日としての安息日

水腫を患っている人をここに連れてきたのは、食事に招いた主人ではなくて、同じく食卓に着いていたファリサイ派の人々、あるいは律法学者たちではなかったかと申しました。

「水腫」という病気は、私も正確には分かりませんけれど、間違った説明なら、後

で訂正しますが、体の組織のあいだ、体腔内に漿液（水）が多量にたまった状態で、むくみ、浮腫となる病気です（広辞苑）。古代社会では、パレスチナも入ると思いますが、非常に多かったと言われています。

この病人を、ここに連れてきたのは、ファリサイ派、律法学者たちが、この人をすぐにでも助けられなければならない、命の危険にある人とは見なかったからに違いありません。

ここには、ここで十分語り尽くすことのできない問題があります。コロナの中でも問題になった「選別」（トリアージュ）という問題です。命に優先順位をつけるという問題です。選別を迫られる、迫られるという状況ならまだしも、ファリサイ派、律法学者は、水腫を患っている人を、はじめから、すぐに助けなくてもいい人と位置づけ、連れてきたのです。それは、やがて、彼を放置していい人、要らない人という思想につながっていきます。

イエスにとって、目の前にいる、「イエスの前に」いる一人の病で苦しんでいる人は、「すぐに」助けられなければならない人なのです。そのままにしていい人などだれもいません。

イエスは、この水腫を患った人を、他と比べて、後回しにしていい人とは見ませんでした。それはイエスが彼を、神の国という視点から見ているからです。この世の視点から見れば、彼は、今すぐ治さなくていい人かも知れません。しかし神の国から見ればそうではないのです。

神の国とは、神が主としています、神の力が支配しているところです。それならどうして、死の力が、死の、いわば手先としての「病の霊」（一三・一一）が、そこにあってよいのでしょうか。まるでそれが我が物顔にそこにいていいのでしょうか。彼らファリサイ派の人々、そして律法学者らは、彼は、いますぐ助けられなくていいとすることによって、死の力そのものに屈しているとしかいうことができない。イエスは病人の手を取り、病気をいやして、お帰しになったのです。命を与え、その命をもって人々と共に再び歩みはじめることを可能にしたのです。彼は、メシア・イエスによって救われたのです。

今日の聖書箇所が、同じような他の箇所と少し違うところがここにもあります。これまでの箇所では、安息日に癒やしをおこなってもいいのかといった、律法の解釈の問題が、つまり、安息日をどのように守るのかというような問題が、中心を占めていたように思います。

それに対して、今日の箇所では、安息日と癒やし、それも重要問題、いわば争点であったかも知れませんが、それよりも、イエスの眼差しは、安息日そのものに向けられていたように思います。

安息日とは、いうまでもなく神が六日間で世界を創造し、第七日に創造の仕事を完成し、自ら休息した日です。神はこの日を祝福しています。ですから、これを私どもどう守るか、癒やしは良いのか悪いのか、ということではなくて、神の永遠の平和と安息を暗示する日、すなわち、救いの日として、礼拝を通して喜びと救いにあずかるべき日なのです。その意味で、安息日の、この日こそ、癒やしと救いがなさるべき時でもあるのです。

（三月一三日）